

# 帰らない日々

2008(平成20)年7月6日鑑賞<宣伝用DVD鑑賞>

★★★★



監督＝テリー・ジョージ／原作＝ジョン・バーナム・シュワルツ『帰らない日々』(ハヤカワ文庫刊)／出演＝ホアキン・フェニックス／マーク・ラファロ／ジュニファー・コネリー／ミラ・ソルヴィノ／エル・ファニング／ショーン・カーリー／エディ・アルダーソン(ブロードメディア・スタジオ配給／2007年アメリカ映画／102分)

……ひき逃げにより最愛の息子を失った家族を襲う悲劇とは……？ そして、調査を依頼した弁護士が、ひき逃げ犯だと知ったら……？ そんなすごい設定の中で提示される、被害者側のみならず加害者側の苦悩を味わう中で、交通事故撲滅への決意を固めたい。私は弁護士としてのそんな視点からこの映画を鑑賞し、講義用のネタ・教材として使うことを決めたが、さてその効用は……？



## これは、絶対観なければ！ 第1の理由は？

私が08年1月1日から6月末までに鑑賞した映画の数を合計すると182本。つまり、平均すると1日1本ペースになっているから、今年12月末ではひょっとして365本に……？ そんな私だが、何となく惰性で観に行ったり、半分義務感で観に行ったりする映画がある反面、事前情報で「これは絶対観なければ！」と思う映画がある。これがその1本。

34年間弁護士としてたくさんの交通事故の損害賠償事件を扱ってきた私は、交通事故の悲惨さを職務上身にしみて感じているため、私なりに交通事故撲滅のための社会的な貢献をしたいと考えている。その具体的行動が、『いまさら人に聞けない「交通事故示談」かしこいやり方』の執筆や、交通事故撲滅、飲酒運転追放のための講義・講演活動だ。そんな講義・講演に絶好のネタが、この映画。それが「これは、絶対観なければ！」と思った第1の理由だ。

## 第2の理由は？

理由の第2は、このひき逃げ犯が弁護士であるうえ、何と被害者の父親が調査を依頼したのがその弁護士だったというすごい設定だと知ったから。なお、私が今も車を運転していれば、いつ自分が加害者になるかもしれないから、というのが第3の理由になったはず。しかし、2001年以降事務所と自宅マンションが徒歩1分という究極の職住接近型のライフスタイルとなったため、2003年10月に車を売却し、自転車生活一辺倒になっている今の私には、この第3の理由はなし。

そんな第1と第2の2つの理由で「これは絶対観なければ！」と思った映画だったが、間の悪いことに、3回実施された『帰らない日々』の試写は東京出張などで行けない日ばかり。そこでDVDをお願いして、自宅で照明を消し、精一杯集中しながら観ることに……。

## こちらの家族は幸せいっぱい、だが……

この映画には「これぞ、アメリカ！」という典型的な家族が2組登場する。まず1組目は、10歳の息子ジョシュ（ショーン・カーリー）と8歳の娘エマ（エル・ファニング）と共に、コネチカット州北西部にある小さな田舎町ケイナンに住んでいる大学教授のイーサン（ホアキン・フェニックス）と妻のグレース（ジュニア・コネリー）。仕事も順調、家族仲も順調。そして9月のある暖かい今日は、チェロを練習しているジョシュのリサイタルの日だ。

家族はもちろん誇らしげにその演奏を鑑賞。そして、見事に大役をこなしたジョシュを車に乗せて帰路についた。ここまでは典型的なアメリカの家族によくある風景だ。その後、カゴに入れたホテルを家で飼いたいと言い始めたエマに対して、グレースが「ホテルの命は短いから、外に出してやらなければ」と諭すシーンや、車に乗った直後なのにエマがトイレに行きたいと言い出すシーンも日常よくある話……。そしてそんな場合、ハンドルを握るお父さんがガソリンスタンドに寄っていこうと言うのも日常風景。

ところが、エマがトイレに行っている間に、ジョシュがホテルを逃がしてやろうと車の外に出て道路に向かったのが、この典型的なアメリカの幸せ家族の運命を変えてしまうことに。

## あちらの家族は幸せ半分、だが……

もう1組の「家族」は、離婚に伴い子供との「面接交通権」が裁判所によって決められているという、訴訟社会アメリカの典型的な家族。したがって、幸せは半分程度……？

2人ともレッドソックスの猛烈なファンである父親のドワイト（マーク・ラファロ）と一人息子のルーカス（エディ・アルダーソン）は、9月のある暖かい夜、週1度の面接日を利用して球場でナイターを観戦していた。試合が長引く中、ケータイに電話してきたのは離婚した妻のルース（ミラ・ソルヴィノ）。つまり、息子との面接の時間が長引き門限に遅れそうになっているから、早く帰ってこいというものだ。しかし、試合が長引き延長戦に入ったのはドワイトのせいではない。しかも、今年のレッドソックスはすごく調子がいいから、地区優勝はもとよりワールド・シリーズ制覇の可能性も……？ そんな風にエキサイトしながら試合に熱中していたドワイトが、ルースからの電話に対して「あまり杓子定規に裁判所の決定を解釈されても……」と考えたのは当然。だって、ドワイトは弁護士なのだから。

延長戦を制した後の高揚感は、甲子園球場に通ったことがある阪神タイガースファンなら誰でもわかるはず。したがって、多分この日のドワイトとルーカスにもそんな高揚感があつたはず。また、ルーカスをルースの家まで送り届けるについて門限に遅れそうという意識があつたとすれば、気持は焦っていたはず。そんなドワイトの車がガソリンスタンドの前を通る時、車の右前がドーンとあるモノに当たったが、これは人間それとも電柱……？ 仮にドワイトが一瞬何に当たったのかわからなかったとしても、こんな場合、ハンドルを持つドライバーとして当然とらなければならない処置とは……？

## アメリカの田舎警察の捜査能力は……？

イーサンの家族とドワイトの家族が住むケイナンという町がどの程度田舎なのかは知らないが、現場から逃走した（つまりひき逃げ犯）ドワイトの車が、その田舎町の中にあるのなら、あるいは事故直後に処分されたのなら、それなりの捜査を尽くせば犯人の特定は十分可能。イーサンの目撃情報は、車は黒っぽいSUV、運転手は帽子を被っていた感じだったというだけの頼りないものだったが、そりゃ仕方なし。

日本でも近時ひき逃げ事件が急増しているが、その検挙率は年々減少しているらしい。ちなみに、2006年1月21日読売テレビ放送の『報道特捜プロジェクト』「多発するひき逃げ事件“許せない”裏側」によると、「ひき逃げ事件は、おととし一年間だけで、およそ2万件。8年間でおよそ3倍に急増する、異常な事態となっている。これに対し、検挙率は年々減少。おととしはわずか26%と、過去最悪の結果となった」とのことだ。優秀さを誇った日本の警察ですらひき逃げ犯に対してこんな体たらくなのだから、ケイナンの田舎警察では犯人検挙は夢のまた夢……？

### 弁護士への調査依頼は正解だが……

そこで業を煮やしたイーサンが犯人を突きとめ、法の裁きを受けさせるためには、弁護士の力が必要と考えたのは正当だが、ケイナンには何と弁護士事務所が1つしかないらしい。そして、ドワイトは上司に雇われている、いわゆるイソ弁。イーサンからの調査依頼を受けたボス弁がその仕事をイソ弁のドワイトに担当させたのは当然だが、こりゃちょっとヤバイ。いや、ヤバすぎる。いくら偶然とはいえ、神サマはホントにこんな偶然を与えるの……？

この映画は『ホテル・ルワンダ』(04年)のテリー・ジョージ監督が、原作者のジョン・バーナム・シュワルツと共に脚本を書いているが、こんな普通では考えられない設定は多分原作どおり……？ また、そんな偶然は田舎警察の捜査能力の欠如に正比例して拡大するイーサンの自力捜査によって、さらに第2の偶然を生んでいくことに……。

### もしこれが日本だったら……？

日本では2001年12月25日に危険運転致死傷罪が新設された。その結果、今ではその最高刑は、致死の場合は20年、致傷の場合は15年となっている。この新法は、『0(ゼロ)からの風』(07年)が描く、最愛の息子をひき逃げで失った母親圭子たちの署名活動によって実現したもので、厳罰化の流れが近時のトレンド。

その流れはさらに進み、2007年5月には自動車運転過失致死傷罪が新設(最高懲役が5年から7年に)され、また2007年6月に道路交通法が改正された。これによって酒酔い運転は「3年以下または50万円以下」から「5年以下または100万円以下」に懲役・罰金刑が引き上げられた他、従来「30万円以下」の罰金刑しかなかった飲酒

検知拒否に「3カ月以下または50万円以下」と懲役刑が設けられるなど、多数の改正がなされた。そして、ひき逃げの懲役・罰金刑も、「5年以下または50万円以下」から「10年以下または100万円以下」と2倍に強化された。

こんな風に日本では厳罰化の流れが進んでいるが、この映画の中ではイーサンからの懸命なアピールの中、イーサンと警察官との間で「状況からすれば10年……？」「たった10年……？」という会話が交わされる。さて、あなたはそれをどう考える……？

## テーマ その1——被害者側の悲劇

交通事故の被害者側の悲劇には3つのパターンがある。第1は、被害者が死亡した場合に残された遺族たちに起きる悲劇。第2は、被害者が死亡せず傷害を受けた場合の被害者自身のその後の人生における悲劇。ここまでは誰でもすぐにわかるが、弁護士として34年間交通事故を扱ってきた私が、時々出会う第3のパターンは、被害者が植物状態になった場合の被害者本人と、その看病にあたる家族たちの悲劇。この場合、被害者本人は自覚症状がどれだけあるかによってその悲劇の度合いが異なるが、その看病にあたる家族たちはホントに大変。

この映画は第1のパターンだが、悲劇の現れ方は家族によって文字どおり千差万別。この映画を観て、私はすぐに講義用の教材として使おうと決めたと決めたが、それは死亡した被害者の家族を襲う悲劇の様子が実にリアルに描かれているから。最初に自分を責めるのは、「ホテルを逃がしなさい」と言ったグレース。「その言葉のせいじゃない！」とイーサンが必死でなだめても、グレースが自分を納得させるまでかなりの時間がかかったのは当然だ。第2は、グーグルの検索サイトで「ひき逃げ犯」を調べていく中、それにハマってしまうイーサンと、それによって自分の方を向いてくれないと考えるグレースとの間に生まれる溝。グレースが悪いのでも、イーサンが悪いのでもなく、悪いのはひき逃げ犯なのだが、そう簡単に気持の整理ができず、また論点の整理と方向性の確立ができないのは当然。

テリー・ジョージ監督が描く、そんな被害者側の家族の悲劇模様をじっくり味わう中で、交通事故の悲惨さを多くの人に実感してもらいたいものだ。

## テーマ その2——加害者側の悲劇

人間は客観的にモノを考えているつもりでも、なかなかそうはできないもの。この映画を観ていると、つくづくそう思ってしまう。それは、イーサンは息子はひき逃げ犯によって殺されたと思いついていて、スクリーン上に出てくるドワイトは必ずしもそうではないこと。つまり、事故直後に車を処分するなどの証拠隠滅行為はしたものの、ドワイトは良心の呵責に悩み、それに耐えかねた結果、1度ならず2度までも警察に自首しようと覚悟を決め、それを実行しようとするわけだ。

この映画が設定した皮肉は、イーサンが失ったのが最愛の息子ジョシュであったのと同じように、ドワイトにも最愛の息子ルーカスがいること。ドワイトにとっては、毎週1度の息子との面会が唯一の楽しみだったが、今ドワイトが自分の「独白」を録音しているのは、それを息子に渡し、自分は潔く刑に服するため。ところが、田舎警察の担当者は、イーサンの依頼を受けたドワイト弁護士がやってくると「犯人のメドはまだ全然立っていない」という捜査状況が無神経にタレ流すだけ。そして、ドワイトからの「情報提供」については「今忙しいから」と言うだけで聞こうとしないのだから、どうしようもない。もっともこれも、テリー・ジョージ監督が偶然や皮肉を映画用に強調しているわけだが、観ているあなたはきっとイライラするはず。

それはともかく、私としては被害者側のイーサンには決してわからない、テリー・ジョージ監督が描く加害者側の悲劇からも、交通事故の悲惨さを実感してもらいたい。

## 第2の偶然とは……？

テリー・ジョージ監督が描く第2の偶然は、音楽教室を開いているドワイトの離婚した妻ルースの元に、被害者のジョシュが通っていたこと。そして、ルースがジョシュの妹エマのピアノを自宅で見せてあげるといふ提案をしたことによって、第2の偶然が生まれることに。つまり、それまでイーサンはジョシュの音楽の先生であるルースとのプライベートな接点は全くなかったのだが、エマがルースの自宅でピアノの練習を見てもらうことになったため、イーサンがエマを迎えに行くことになったわけだ。その結果、ルースの家にエマを迎えにきたイーサンと、週1度の面会のためにルーカスを迎えにきたドワイトが鉢合わせすることに。

今日もドワイトはルーカスと共にレッドソックスの試合の観戦に行くらしい。する

と、その服装はあの時と同じように帽子をかぶったもの、すると、ドワイトの車は……？ 一瞬そう閃いたイーサンは後日、エマのピアノ発表会がルースの指導のおかげで大成功だったという口実をつけてルースの家に入り込んだ挙げ句、ルーカスの部屋の中に入り込み、ドワイトの車の前で微笑む家族の写真を発見することに。当然その車は黒っぽいSUV。すると、あの時のひき逃げ犯は……？

### 銃社会なればこそ、こんな行動が！

交通事故の被害者やその家族を襲う悲劇のありさまと当事者たちの苦悩は、きっと日米共通。しかし、ひき逃げ犯がドワイトだと確信したイーサンがとるその後の行動は日米では大違い……？ つまり、日本では警察に通報するのがせいぜいだが、アメリカではあるいはイーサンの場合は、直ちにガンショップに電話して銃の購入という行動に走ることになるからすごい。

去る6月26日、アメリカ連邦最高裁判所は、市民が自宅で銃を所持することを禁じたワシントンの銃規制条例について5：4の僅差で違憲とする判決を下した。これは、アメリカ全体として進んでいる銃の規制強化の流れに水をさすものだが、やはりアメリカはなお銃による自衛という概念が定着しているわけだ。もっとも、イーサンが実弾とともに銃を購入したのは自衛のためではなく、はっきりと頼りない警察に代わってドワイトに対する私的制裁を行うため。さあ、イーサンはドワイトに対してどんな行動をとるのだろうか……？

### それはレッドソックス3連勝の夜に！

2007年のワールド・シリーズでレッドソックスは3連勝！ そんなすばらしい試合を、今ドワイトはルーカスと共に満喫していた。ドワイトが今ルーカスと1週間も一緒にいることができているのは、特別にドワイトがルースを訪れ、直接その許可をもらったため。つまりドワイトは、自首して刑に服することになればこれから長い間ルーカスに会うことができなくなるため、最後の時間をルーカスと共に過ごしたいとルースに直訴したわけだ。もちろん、ルースに伝えたのは、「しばらくこの町を離れなければならなくなったから」というだけだが、今は離婚していても、長年連れ添った(?)ドワイトの気持はルースにも伝わったらしい。

その結果、実現したのが「父と息子で過ごす1週間」というわけだが、そんなチャ



ンスの中、レッドソックスが3連勝したのは2人へのお祝い……？ しかし、世の中  
いいことばかりではないのは当然。イーサンが銃を持ってドワイトの家に乗りこんで  
来たのは、レッドソックスが3連勝した夜のこと。さあ、ここからどんな事態に  
……？

## 結末はこんなパターン？ それとも？

こんな状況になれば、予想される映画の結末はイーサンがドワイトを射殺し、イー  
サンも逮捕されてしまうというもの。たしかに、それが普通に考えられる結末だが、  
こんなパターンではちょっとヒネリ不足……？

つまり、この映画の結末で大切なことは、それまでイーサンは被害者側として、ド  
ワイトは加害者側として互いに体験していた交通事故の悲劇と苦悩を、互いの共通の  
ものにする。つまり、互いにそれまで心の底に秘めていた怒りや思いをぶつけ合  
うシーンが不可欠だと私は思うわけだ。

さて、そんな私の考え方に対して、テリー・ジョージ監督が用意した結末とは  
……？ それをじっくり鑑賞したうえで、1人1人が交通事故の悲劇を考え、事故防  
止のために何ができるのかを考えたいものだ。

## 激辛批評にひと言！

映画批評サイト「映画ジャッジ！」における『帰らない日々』についての岡本太陽  
氏の映画批評は激辛。「加害者側、被害者側の両面から描いている点が良かった」と  
一応メンツは立てているものの、「圧倒的にチープである」「単なるメロドラマを観せ  
られた気がした」「かなり期待はずれだった」「陳腐なストーリーのこの映画」と厳し  
い言葉のオンパレード。したがって、採点は100点満点の50点となっている。

私はこの「映画ジャッジ！」をよく読み、参考にしているのだが、彼の評価には賛  
同できない。岡本氏がこのような激辛批評をしたのは、どうも「私たちは犯罪者の彼  
をどういう訳か、弱者と判断し、同情の目で見てしまう。怒りと疑いで心が乱される  
イーサンよりも轢き逃げたドワイトに同情してしまうのである」という分析に原因  
があるようだが、その分析からなぜこの映画がチープで陳腐なストーリーになるのか  
は説明不足でよくわからない。

もっとも、私は弁護士としてこの映画が、被害者側、加害者側の両者について交通



事故の悲惨さをよく浮かびあがらせていることに大きなウエイトを置いたため星4つとしたのだが、その点の評価は岡本氏も同じ……？

したがって、この映画の何がチープで陳腐なののかについて、1度岡本氏とじっくり議論してみたいものだ。

2008(平成20)年7月10日記

第3章

傑作・佳作がいっぱい！



「帰らない日々」

きょうからシネ・リーブル梅田ほかで公開



©2007 Focus Features LLC. All Rights reserved

悲劇の連鎖から何を学ぶ？

塩屋俊監督の「ひからの風」(2007年)は、飲酒・ひき逃げ犯によって息子を奪われた母親が飲酒運転の撲滅と厳罰化を求め、危険運転致死傷罪を新設させる案を描いた感動作。一九七四年の弁護士登録以来三十四年間交通事故事件を扱い続けた私は、そんなテーマの講義・講演で必ずそ

の予告編を流したが、今は「帰らない日々」も。ここで描かれるのは、田舎町における、ついでに家族の悲劇。ひき逃げで突然息子を失った大学教授イーサン(ト)は警察の状況からすれば「十年」の言葉に衝撃。また連年の捜査が進まないことに焦り、弁護士のドワイト(D)に調査を依頼

したが、ひき逃げ犯は実はこのD。そんな運命の皮肉の中で浮かび上がる人間ドラマがこの映画の焦点だ。怒りの対象とすべき犯人が逮捕されない中、息子を失った悲しみは、Iと妻さらに娘との軋轢を生み、I家は今や崩壊寸前。見どころは、いかにも自己責任の困らしいIの

自力調査力。偶然の積み重ねとプロも驚く執念で犯人にたどり着いたIが拳銃購入に走るのもアメリカ的。他方、良心の呵責に苦しむDをIの弁護士と見る警察は「犯人のメドはまだ」と弁解するだけ。自首を決意したDは今、最後のひとときを息子と共に野球観戦に当てていたが、そこを襲ったのが銃を持ったI。ラストの男の対決に表現される人間ドラマは秀逸だ。

厳罰化の流れの中、○

大阪日日新聞 2008(平成20)年8月23日